

島本町文化財調査報告書

第 37 集

広瀬遺跡発掘調査概要報告

令和 2 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は、平成 25 年度に実施した宅地造成工事に伴う広瀬遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

この発掘調査では、平安時代の掘立柱建物跡を検出しました。本町では、平安時代の遺構の発見例が少なく、平成元年度の発掘調査時に検出した建物跡、平成 24 年度の発掘調査時に検出した建物跡のみしか確認できておりませんが、平安時代以降、本町域は交通の要衝として発展し、皇族・貴族がたびたび遊獵に訪れ、平安時代後期の仏像なども存在することから、人々が活発に活動していたことが想定できます。このような中で、新たな平安時代の遺構を確認できたことは、本町のこの時期の歴史の解明の一助になるものと思われます。

そして、このような成果を得られましたのも、工事事業者、土地所有者の方々、そして調査地近隣および関係諸機関の皆様のご理解とご協力をいただいたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 3 月

島本町教育委員会

教育長 持田 学

例　　言

1. 本書は、平成 25 年度に原因者負担で、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した、広瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育子ども部生涯学習課職員木村友紀を担当者とし、調査は平成 25 年 10 月 1 日に着手し、平成 25 年 11 月 8 日に終了し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、令和 2 年 3 月 31 日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。
(順不同)
【調査員】坂根 瞬 原 由美子
【調査補助員】布施 英子、川端 玲子、
竹村 洋香、菅原 朋奈、
眞子 悠乃
4. 本書の執筆は木村（第 1 章、第 2 章第 1～3・5 節）、久保（第 2 章第 4 節）が行い、作成・編集は木村・久保・坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。

凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海水面 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土座標第 IV 系における座標北である。

2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第 12 版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。
P : ピット SK : 土坑 SD : 溝
4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目　　次

序文

例言・凡例・目次

挿図目次・付表・図版目次

第 1 章 はじめに

- 第 1 節 島本町の地理的概要 ----- 1
- 第 2 節 島本町の歴史的環境 ----- 1

第 2 章 調査の概要

- 第 1 節 調査経過 ----- 3
- 第 2 節 層位 ----- 4
- 第 3 節 検出遺構 ----- 4
- 第 4 節 出土遺物 ----- 9
- 第 5 節 まとめ ----- 11

挿図目次

- 第 1 図 調査地位置図 (1/2,500) ----- 3
- 第 2 図 調査区断面図 (1/50) ----- 5
- 第 3 図 調査区第三遺構面平面図 (1/250)
----- 6
- 第 4 図 S B 01 平面図・断面図 (1/100)
----- 7
- 第 5 図 S B 02 平面図・断面図 (1/100)
----- 8
- 第 6 図 調査区第四遺構面平面図 (1/250)
----- 9
- 第 7 図 出土遺物 (1/4) ----- 10

付 表

付表1 本報告書掲載遺跡 ----- 3

図版目次

図版一 調査前風景、第一遺構面検出状況、

第二遺構面全景

調査前風景（北東から）

第一遺構面検出状況（北西から）

第二遺構面全景（南から）

図版二 第三遺構面全景、S B 01・02 検

出状況、埋戻し状況

第三遺構面全景（南から）

S B 01・02 検出状況（東から）

埋戻し状況（北から）

図版三 調査区北壁・南壁・西壁

調査区北壁東端

調査区北壁西端

調査区南壁東端

調査区南壁中央

調査区南壁西端

調査区西壁北端

調査区西壁中央付近北側

調査区西壁中央付近南側

図版四 調査区西壁、北試掘坑、南試掘坑、

調査区北拡張部・東拡張部

調査区西壁南端

北試掘坑（北から）

南試掘坑（北から）

調査区北拡張部（南から）

調査区北拡張部西壁

調査区北拡張部北壁

調査区東拡張部（北から）

調査区東拡張部（南から）

図版五 P 38・55・157・166、S D 01

P 38（東から）

P 55 遺物出土状況（北から）

P 157 遺物出土状況（東から）

P 166 遺物出土状況（西から）

S D 01（南西から）

S D 01 断割り南壁東端

S D 01 断割り南壁中央

S D 01 断割り南壁西端

図版六 出土遺物

第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市と、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約7km、東西約4kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は約16.81km²となる。その地形は、町の北側が山地・丘陵地、その南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その東南側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は主に丹波層群によって構成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって構成されている。

また、平野部は、9～13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るという小規模なものが多い。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、水無瀬川等の他の河川からの堆積物によっても構成され、小河川付近には扇状地地形が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形がみられる箇所もある。

現在、本町域では、平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいるが、いまだ山地部には開発が及ばない範囲が広く、森林樹が良好に保たれており、「大沢のすぎ」、「尺度のやまもも」、「若山神社のツブラジイ林」が大阪府により天然記念物として指定されている。

第2節 島本町の歴史的環境

島本町における人々の活動の痕跡をたどると、最も古くは旧石器時代にまでさかのぼる。段丘上に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器やサヌカイト剥片を数点採集しており、後期旧石器時代におけるキャンプサイトなどの存在を想定することができる。

縄文時代になると、段丘上に位置する越谷遺跡において縄文時代中期の土器片が多数出土している。また、平野部に広がる広瀬遺跡では縄文時代晩期の竪穴式建物跡を確認しており、集落が展開していた可能性が考えられる。

次に弥生時代では、桜井駅跡で弥生時代前期の遺物の出土しているが、弥生時代中期になると、青葉遺跡A地点・B地点において竪穴建物跡や溝を検出しており、桜井駅跡・広瀬溝田遺跡では耕作溝を確認している。これらは、いずれも平野部に位置する遺跡であり、この付近一

帶においては、弥生時代中期に集落や耕作地が広がっていたものと考えられる。また、弥生時代後期になると、段丘上に位置する越谷遺跡や伝待宵小侍從墓において当該期の遺物の出土を確認している。

古墳時代においては、これまでのところ集落に関わる明確な遺構を検出していないが、広瀬遺跡や越谷遺跡などで古墳時代後期の遺物が出土している。

飛鳥～奈良時代になると、丘陵部で鈴谷瓦窯が操業した。これまでに2基の瓦窯跡が確認されており、出土瓦の特徴から7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西側にある御所ノ平遺跡では竪穴式建物跡を確認しており、瓦製作の工房跡の可能性がある。この他、奈良時代中期には、水無瀬川右岸において東大寺領水無瀬荘が存在していたことが、正倉院に伝わる「摺津職嶋上郡水無瀬荘図」によって知ることができる。

続日本紀和銅四年正月丁未条には、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれたとあり、島本には大原駅が設置されたということが定説となっていた。大原駅は平安時代前期のうちには廃止になったようであるが、平安時代になると、京と西国とを結ぶ交通の要衝としての島本の地の重要性は増していった。広瀬遺跡においては、西国街道沿いで発掘調査で小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構を検出している。また、広瀬南遺跡では、河道中より須恵器の大甕が見つかっており、これは淀川の水運により運ばれてきたものの可能性がある。

さて、このような地勢にある島本町においては、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地へ訪れるようになった。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵に訪れ、文德天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いている。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物群が検出しているが、これは惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮の造営を行った。この水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されている。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦を検出しており、また、丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園施設と考えられる遺構を検出している。

その後、建武新政から室町時代へと時代が動くとき、楠木正成・正行父子が別れた場所として太平記に記述のある桜井宿が、現在桜井駅跡として国史跡に指定されている。

【参考文献】

島本町町史編さん委員会『島本町史』本文篇 島本町役場 昭和50年

島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書』第1集～第36集 島本町教育委員会 平成3年～平成31年

名神高速道路内遺跡調査会『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成8年

名神高速道路内遺跡調査会『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成9年

第2章 調査の概要

第1節 調査経過

調査地（第1図）は、奈良時代～近世の集落跡である埋蔵文化財包蔵地「広瀬遺跡」の西端付近に位置する。当該地から東に約200m位置する場所で、平成24年度に発掘調査を実施しており、9世紀中頃～9世紀後半の掘立柱建物跡群を検出している。また、この広瀬遺跡内からは、近年、縄文時代や弥生時代の遺構・遺物の存在を確認したり、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮に関連する遺構、旧山陽道の路面など新たな発見が相次ぐ地域である。

今回の調査は、当該地において、宅地造成工事が計画され、その敷地内に約322m²の道路が敷設される予定であったため、道路部分を対象として、平成25年9月9日に道路部分西側に幅約1.5×1.5m、東側に幅約2.0×2.0mの調査区を設定し、確認調査を実施したところ、土師器や須恵器等の遺物の存在を確認したため、発掘調査に移行したものである。

地区名	遺跡名（次数）	遺跡所在地	調査期間
広瀬地区	広瀬遺跡 (HS 13-2 小代)	広瀬五丁目 776	平成25年10月1日 ～11月8日

付表1 本報告書掲載遺跡



第1図 調査位置図 (1/2,500)

当該調査は、平成 25 年 10 月 1 日から同年 11 月 8 日まで実施し、その結果、10 世紀中頃～後半の掘立柱建物跡や弥生時代の遺物を含む溝跡の存在を確認した。

調査の際には、遺構面を 4 面に分けて、調査を行った。第一遺構面では、土師器・須恵器等が出土したが、近世以降と考えられる鋤溝等しか検出できなかった。第二遺構面は、土師器・瓦器等が出土しており、中世に属する遺構面と考えられるが、明確な遺構は僅少であった。第 3 遺構面からは、10 世紀中頃から後半と考えられる遺構を検出しており、遺物としては黒色土器・土師器・須恵器等が出土している。第四遺構からは、遺構としては S D 01 のみしか確認していないが、この溝跡から弥生土器末期から古墳時代初頭の土器が出土しており、弥生時代末期以降の遺構面であることがうかがえる。

第 2 節 層位

調査地東側には、厚く盛土（第 1 層）が堆積しており、その下には、調査地全域に、現代の耕作土（第 2・3 層）及び床土（第 4 層）が堆積しているのを確認した。

現代の耕作土及び床土を除去して露出した土師器・須恵器等の遺物を多く含み、整地層と考えられる黄褐色砂粘土（第 5 層）直上面を第一遺構面として平面的に掘削を行ったが、近世以降の鋤溝と考えられる遺構しか検出することができなかった。そのため、第 5 層を除去して、中世の遺物を多く含み、整地層と考えられる黄褐色粘砂土（第 13 層）直上面を第二遺構面として、平面的に掘り広げて調査を行ったが、少数のピット等の遺構のみしか確認できなかった。この第 13 層を除去して、露出した整地層と考えられる灰黄褐色粘砂土（第 14 層）、にぶい黄褐色粘砂土（第 15 層）及び黄褐色砂質土（第 18 層）直上を第三遺構面として平面的に掘り広げたところ、S B 01 及び S B 02 等の掘立柱建物跡の他に多くのピットや土坑等の遺構を検出した。この第三遺構面で検出した遺構の埋土内から弥生時代の遺物が多く出土し、調査区西壁付近に設定したサブレンチ南側において、溝跡の存在を確認していたことから、第 14・15・18 層を除去し、褐色粘砂土（第 24 層）及び直径 3 cm までの小礫を非常に多く含む褐色砂礫土（第 25 層）直上を第四遺構面にして掘り広げた。その結果、弥生時代の遺物を含む S D 01 の存在を確認した。

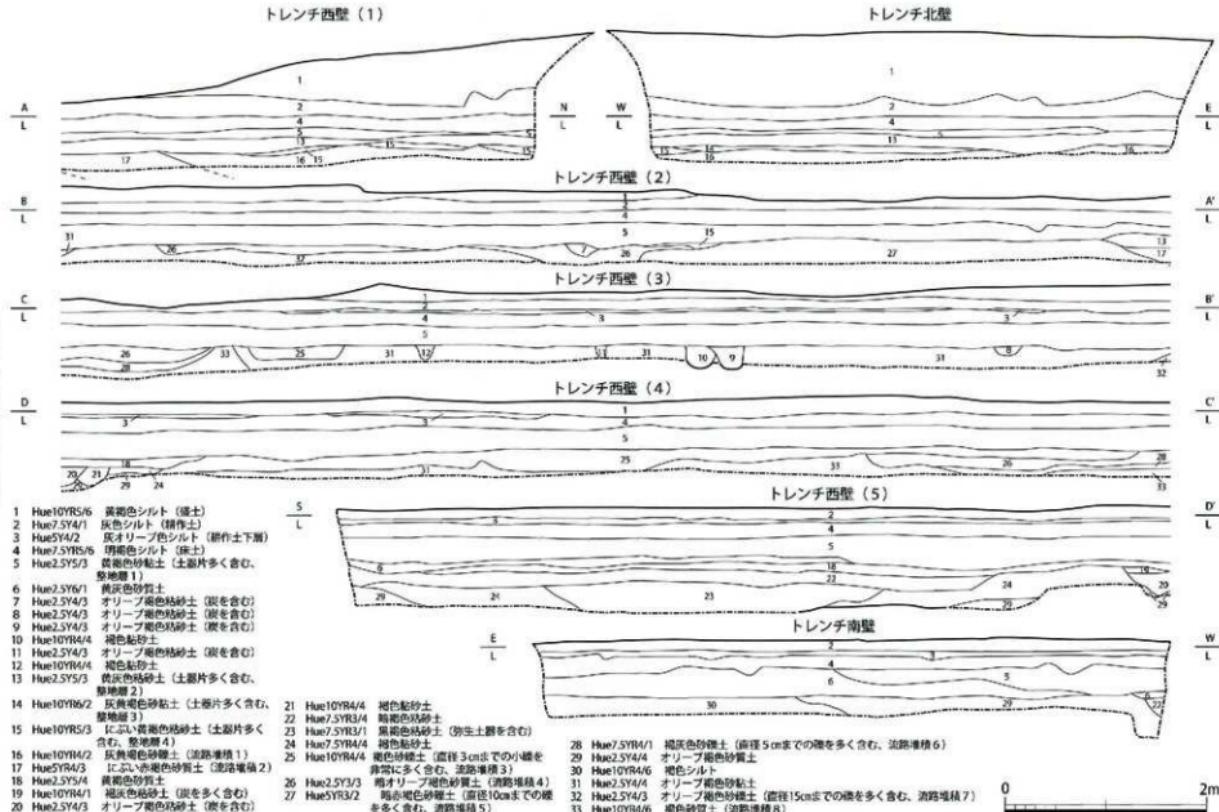
当報告書では、第三遺構面で検出した S B 01 及び S B 02、第四遺構面で検出した S D 01 を中心に報告することとする。

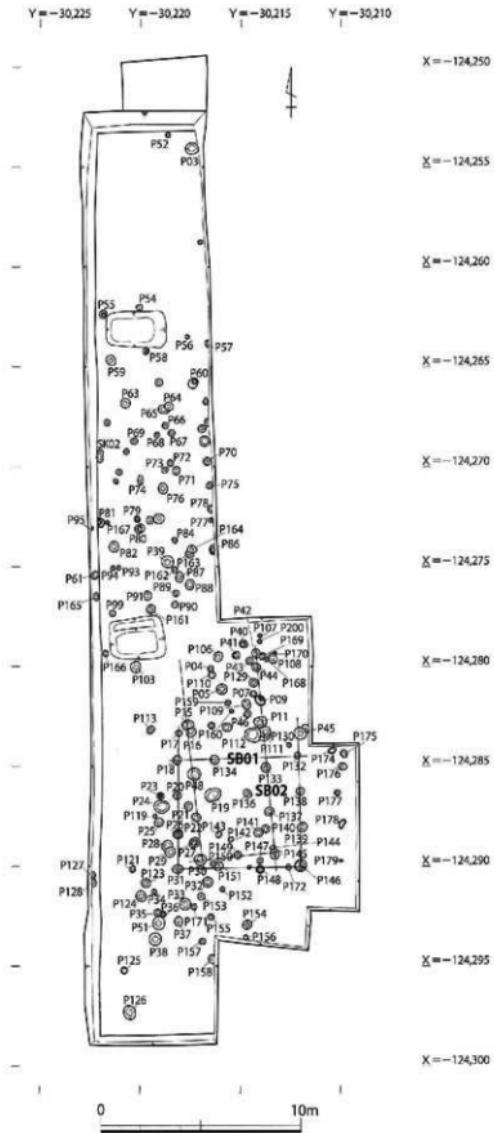
第 3 節 検出遺構

第三遺構面でピット等の多くの遺構を確認した（第 3 図）。特に、S B 01 及び S B 02 のように平安時代中頃から後半の掘立柱建物跡と考えられるような遺構の存在を確認したため、そ

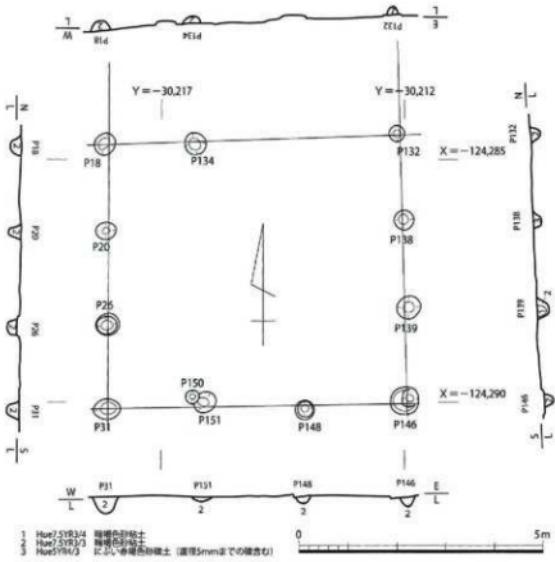
第2図 調査区断面図 (1/50)

5





第3図 調査区第三遺構面平面図 (1/250)



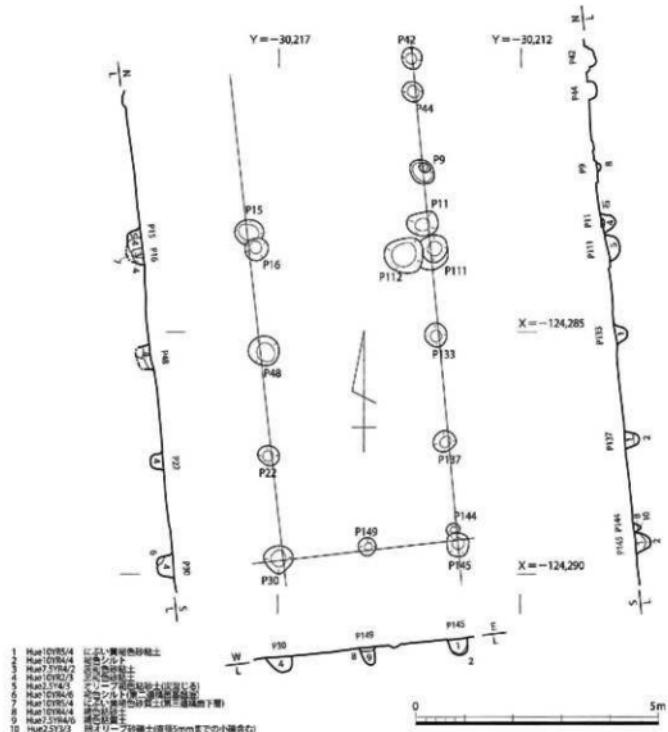
第4図 SB 01 平面図・断面図(1/100)

の広がりを確認することを目的に、これらの周囲の調査区を拡張して調査を行った。

また、当該調査地の北側は、旧山陽道である西国街道に面しているが、広瀬遺跡内の西国街道に面した場所の調査において、山陽道の路面と考えられる遺構を検出していることから、調査地の北側を拡張して、現在の道路近くまで調査を行ったが、今回の調査では山陽道に関連すると考えられるような遺構の存在を確認することはできなかった。

S B 01 (第4図) 第三遺構面で検出した遺構である。P 18・20・25・31・132・134・138・139・146・148・151 で構成された掘立柱建物跡である。東西3間×南北3間であり、東西幅は約6.1m、南北幅は約5.4mを測る。東西の柱間は約2.1mであり、南北の柱間は約1.8mである。P 132とP 134の間の柱穴が存在しないため、精査を繰り返したが、確認することはできなかった。他の柱穴も、深さが浅いため、削平等により、欠損している可能性がある。S B 01 の位置は、S B 02 と重ねていることから、同時期に共存することはできないが、構成する柱穴に切り合い関係がなく、その先後関係を知ることはできなかった。構成するピットの中の埋土内から出土した遺物の年代が、大きく変わらないため、大きく期間を空けず、建て直しが行われたものと思われる。

P 148の埋土内から、10世紀中頃から後半頃の黒色土器A類(図7-22)等が出土して

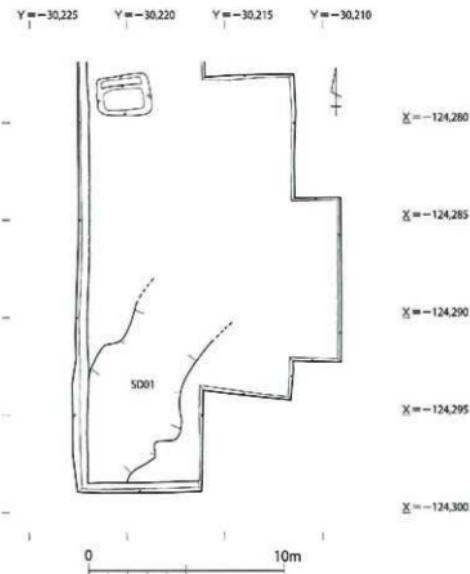


第5図 SB 02 平面図・断面図 (1/100)

いることから、その頃に建てられた掘立柱建物跡と考えられる。

S B 02 (第5図) 第三造構面で検出した遺構である。P 11・15・22・30・48・133・145・149で構成された掘立柱建物跡である。東西2間×南北3間を検出しているが、P 11とP 15の間に柱穴を確認しておらず、北側に延長する可能性がある。また、P 11とP 15の間の柱穴が削平等により、欠損している可能性もある。東西幅約3.6mであり、柱間は約1.8mである。南北幅はP 15からP 30までが約6.6mであり、P 15からP 48までが2.4m、P 48からP 22までが約2.1m、P 22からP 30までが約2.1mを測る。

P 11・30の埋土内から、10世紀中頃から後半頃の黒色土器A類(図7-20・21・24・25)、P 48・145の埋土内から10世紀代の土器(図7-12)、10世紀中頃から後半頃の土器の皿(図7-15)等が出土していることから、その頃に建てられた掘立柱建物跡と考



第6図 調査区第四遺構面平面図 (1/250)

えられる。

S D 01 (第6図) 第四遺構面では、調査区南側において、S D 01を検出した。幅約4.5mの北東から南西に向かって流れる自然流路であるが、調査区南側の下層確認時に検出した遺構であり、北側がどこまで続くか確認することはできなかった。この溝跡の一部に断割りを入れて、堆積状況を確認したところ、土層内から弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物を包含していることを確認した。このことから、この溝跡は弥生時代末期以後に埋没したものであることがうかがえる。

第4節 出土遺物

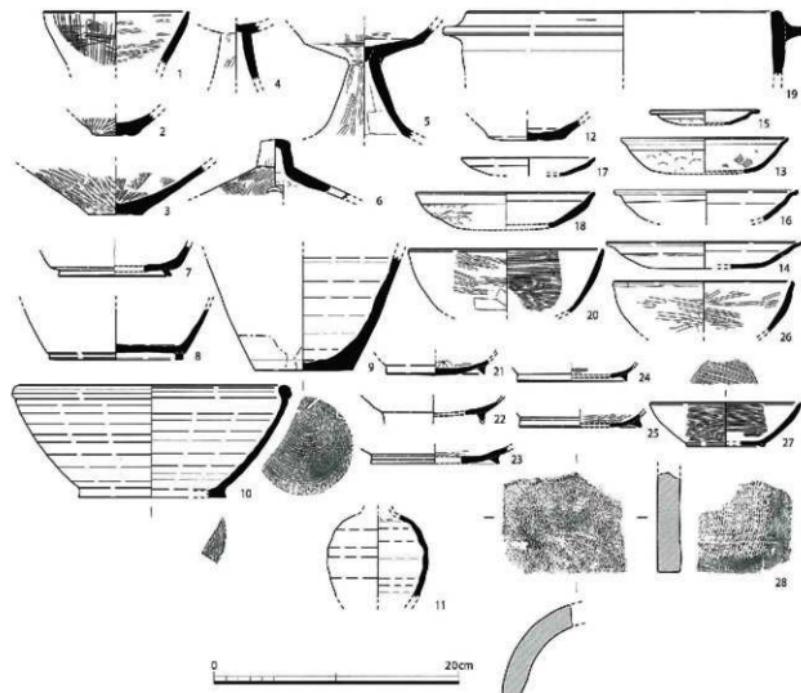
今回の調査で出土した遺物は、コンテナ2箱であった。出土遺物のほとんどが土器類で、他に瓦が少数出土している。

土器の年代は、弥生時代末期以降から平安時代頃までを中心としており、弥生時代末期から古墳時代初期頃の遺物の大半は調査地の南側で検出された溝 S D 01 からのものである。

1～6は弥生時代末期から古墳時代初期頃のものと思われる土器群である。1は小壺の口縁部で、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。2は平底の甕の底部で、外面にタタキ

を施し、内面にはナデを施す。3は外に大きく張り出す壺の底部で、外面に丁寧なヘラミガキが残り、内面はナデを施す。4～6は高壺の脚部で、外面に縦方向のヘラミガキが施している。6については3か所にスカシが残り、外面に丁寧なヘラミガキを残している。

7～11は須恵器で、7・8は低い貼り付け高台を付す杯Bの底部である。底部外面に粗いナデを施し、高台の内外面には貼り付け時のナデを施す。7は少し古相を呈し、8世紀頃と見ておきたい。8は体部が開き、高台が体部の立ち上がり近くに付く8世紀末頃から9世紀前半頃のものと見ておく。9は灰釉陶器壺の底部で、外面に糸切り痕を残す。東海産である。10は鉢で玉縁状の口縁を持ち、底部外面に糸切り痕を残している。11は壺Mとされる小型の壺である。体部のみが残る。これらは胎土や形状の特徴より亀岡窯産で、10世紀前半頃と見ておく。



第7図 出土遺物 (1/4)

12～19は土師器である。12はロクロ土師器の底部で、10世紀代に位置付けておく。13は杯、14もやや浅い杯である。口縁部の外反は緩やかで10世紀前半代のものと見ておきたい。15・16は皿で器壁が薄く口縁部のナデ調整によって端部が屈曲する。10世紀中頃から後半頃のものと見ておく。17・18は体部が広がりを見せる皿で、18は体部にユビオサエと粘土紐痕を残す。11世紀中頃と見ておく。19は羽釜で、短く厚い飼部が口縁端部近くに付く特徴的な形態を呈する摂津産のもので、内外面にススの付着が見られる。10世紀末頃から11世紀前半頃と見ておく。

20～27は畿内の黒色土器の食器類で、20～25は内面のみを黒色化したA類（内黒）で、22は杯あるいは椀である。23～27は小さく低い高台の付く椀である。黒色化する内面には、ほぼヘラミガキを施している。10世紀前半頃と見ておく。26・27はB類（外・内黒）の椀で、双方とも内外面にヘラミガキを施している。10世紀中頃から後半頃と見ておく。

28は丸瓦である。凹面には、精緻な布目痕を残し、凸面にはタタキの痕跡は残さない。側面の内外には、面取りを施さず、古代に属するものと考えられるが、詳細な年代は不明である。

第5節 まとめ

今回の調査では、第三遺構面において、S B 01 及び S B 02 の2つの掘立柱建物跡を検出した。これらの掘立柱建物跡は、その構成する柱穴内の埋土から出土した遺物の年代から10世紀中頃から後半頃に造営されたものであることがうかがえる。平安時代の遺構は、平成元年と平成24年度に実施した広瀬遺跡内の調査で確認している。特に、平成24年度の調査地は、今回の調査地から東に約200mと近く、9世紀中頃から9世紀後半と平成24年度の発掘調査で見つかった掘立柱建物跡群の方が、やや先行するものの、年代も近い。時代が下るにつれて、土地利用が当地に移った可能性がある。

第四遺構面では、弥生時代の遺物を含むS D 01を確認した。S D 01は、自然流路と考えられるが、当地周辺に弥生時代の集落が営まれていたことがうかがえる。明確な弥生時代の遺構・遺物を確認した例は少ないが、広瀬遺跡西端付近から桜井駅跡、広瀬溝田遺跡周辺において弥生時代の遺物を含む溝跡や農耕に関するものと考えられる溝跡が見つかっており、この周辺が弥生時代の人々の生活圏となっていたことがうかがえる。

本町では、平安時代と弥生時代の遺構・遺物の発見例が少なく、今回の調査成果だけでは、多くのことを述べることは難しいが、資料の蓄積を続け、両時代の遺跡の性格の把握に努めていきたい。

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査概要報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	木村 友紀、久保 直子、坂根 瞬
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 Tel.075-961-5151
発行年月日	令和2年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号			(m ²)		
調査範囲								
ひろせいいき 広瀬遺跡 (HS 13-2 小代)	しまもとちょうさくらい 島本町広瀬五丁目 776	27301	28	34° 52' 45"	135° 40' 09"	2013.10.1 ~ 2013.11.8	361.0	宅地造成工事に 伴う記録保存調 査
所収遺跡名								
ひろせいいき 広瀬遺跡 (HS 13-2 小代)	集落	弥生 平安	振立柱建物跡	弥生土器・土師器・ 須恵器・黒色土器	平安時代の振立柱建物 跡を検出			

島本町文化財調査報告書 第37集

発行 島本町教育委員会
 〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
 Tel.075-961-5151
 発行日 令和2年3月31日
 印刷 三星商事印刷株式会社
 〒604-0093 京都市中京区柄町通竹屋町下ル舟肘町300
 Tel.075-256-0961

図 版

図版一 調査前風景、第一遺構面検出状況、第二遺構面全景



調査前風景 (北東から)



第一遺構面検出状況 (北西から)

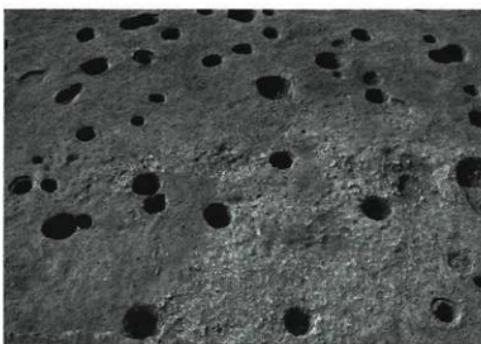


第二遺構面全景 (南から)

図版一
第二遺構面全景、
S B 01・
02検出状況、
埋戻し状況



第三遺構面全景（南から）



S B 01・02 検出状況（東から）



埋戻し状況（北から）

図版三 調査区北壁・南壁・西壁



調査区北壁東端



調査区南壁西端



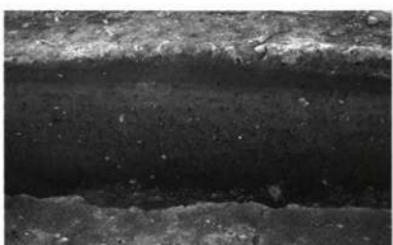
調査区北壁西端



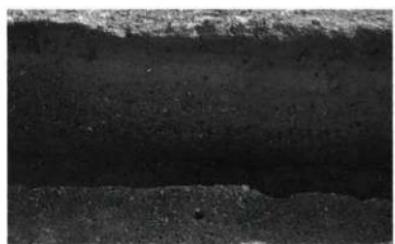
調査区西壁北端



調査区南壁東端



調査区西壁中央付近北側



調査区南壁中央



調査区西壁中央付近南側



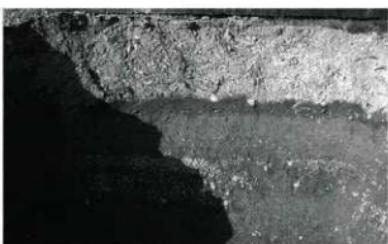
調査区西壁南端



調査区北拡張部西壁



北試掘坑（北から）



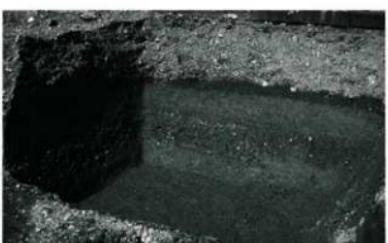
調査区北拡張部北壁



南試掘坑（北から）



調査区東拡張部（北から）



調査区北拡張部（南から）



調査区東拡張部（南から）

P
38
•
55
•
157
•
166

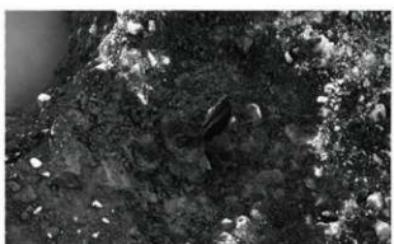
S
D
01



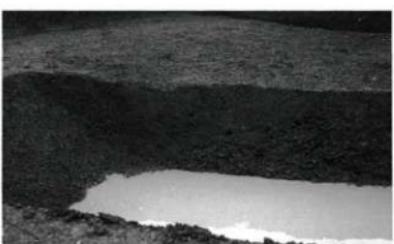
P 38 (東から)



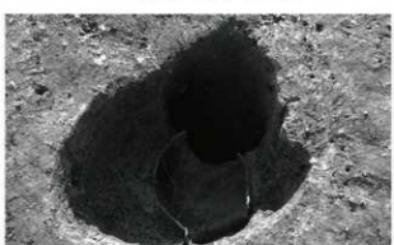
SD 01 (南西から)



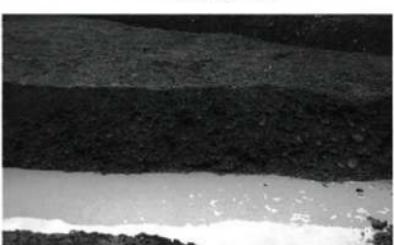
P 55 遺物出土状況 (北から)



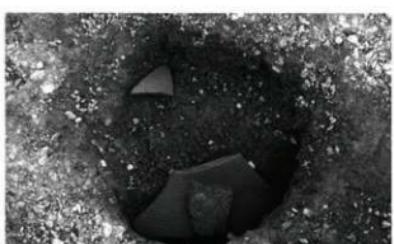
SD 01 断割り南壁東端



P 157 遺物出土状況 (東から)



SD 01 断割り南壁中央



P 166 遺物出土状況 (西から)



SD 01 断割り南壁西端

圖版六
出土遺物

